

博士論文の要約

氏 名：池谷和信

論文題目：**Sedentarization and Lifeway Choices of the Botswana San: Mobility and Subsistence (1929-2010)**

定住化は、人類の歴史のなかで生活様式を変える革新的な出来事であった。旧石器時代に西アジアで人類による最初の定住化が行われて定住狩猟採集民が誕生したあとに、農耕や家畜飼養が開始されたといわれる。これまで民族学では、近現代におけるイヌイット、オランアスリ、アエタ、ムラブリ、サンなどの遊動狩猟採集民を対象にした民族誌が、定住化研究への貢献をしてきた。具体的には、定住化の過程、集落パターン、狩猟採集と漁撈を組み合わせた生業複合、獲物の分配からみた社会関係など、これらの維持と変容が明らかにされた。

しかしながら従来の研究では、定住化後の集団が調査対象として選ばれることが多く、定住前の世帯の移動や生業複合の様態が十分に明らかにされていない。また生業では、狩猟採集のみならず農耕や家畜飼養に焦点を当てた研究がほとんどみられない状況にある。

この結果、遊動から定住への多様な過程、定住化による生業複合の変化が十分に把握されていない。

本論文では、南部アフリカのカラハリ砂漠に暮らす狩猟採集民サンを事例にして、1929年から2010年までの約80年間におけるサンの定住化の過程とそれともなう社会変容を、人の移動と生業複合の側面から把握することが目的である。筆者は、ボツワナ中部の中央カラハリ動物保護区（以下、リザーブと呼ぶ）の内外でサンが暮らす3つの集落（モラポ、カデ、ニューカデ）を主な対象にして生態人類学的調査を実施してきた。具体的には、通算で2年間の滞在のなかで各種の狩猟活動に参加しながらおこなった調査と1987年から2010年までの23年間にわたる定点調査である。なかでも遊動時代の移動は、古老からの聞き書きによって、新たに対象地の地名を収集して出生や婚姻など、各世帯の出来事がおこった場所をおさえることにより、数十年間における世帯の移動の動向を把握した。これらの結果は、以下の3つの時代に分けてまとめられる。

1) 1929—1970年（「遊動キャンプと半定住集落との共存の時代」）

遊動生活の実際：これまで明瞭にされてこなかった遊動民サンの居住地移動を対象にして、地名と出来事を使用しての古老からの聞き書き調査によって、1930年、50年、60年の同一グループにおけるそれぞれの遊動域が復元された。1930年代のサンでは、1年の間、一つのキャンプの領域内において遊動生活が行われていた。しかし、数十年単位でみると井戸の水を求めて長距離移動をするなど、通年の遊動域内でおさまらない移動になっていたことを明らかにした。

生業複合：この時代の生業では、狩猟のなかで弓矢猟や犬猟のほかには罌猟が盛んになっている。また、サンはカラハリ農牧民にキツネやジャッカルの毛皮を提供する代わりに彼らからタバコや犬などを入手しているなど、サンとカラハリ農牧民の社会経済関係が維持されていた。1950年頃は天然痘の流行によって数多くのサンが死亡した。この頃には、オランダ系移民の牛牧場にて家族で移動して働くサンの集団もみられた。

2) 1980—1996年（「定住集落と半定住集落との共存の時代」）

定住化の過程：ボツワナ政府の近代化政策によってリザーブ内に井戸やクリニックがつくられ、特定の集落への定住化がおしすすめられ遊動キャンプから定住集落への移行が進行した。しかし定住化の過程は、井戸が設置されているカデ集落と井戸のない半定住集落のモラポでは異なっていた。

生業複合：カデ集落に注目すると、狩猟採集、ヤギ飼養、農耕、民芸品生産、道路工事への従事など生業複合がみられた。狩猟では、弓矢猟に変わって騎馬猟や犬の助けを借りる槍猟が盛んになった。農耕牧畜では、ヤギの所有頭数に世帯間の違いがみられ、ほかの集落の居住者とのあいだにヤギの委託関係が認められた。スイカや豆類を栽培する農耕は一部の人が行ったが、栽培スイカの場合には収穫量の多い年に世帯を超えての収穫物の分配がみられた。

3) 1997—2010年（「村落と半定住集落との共存の時代」）

定住化の過程：ボツワナ政府による1997年の集住化政策によって、カデほかの定住集落からリザーブの外のニューカデ村など他の村への移動が進行した。ニューカデ村は、個々の家屋の配置と区画が決められた住宅地が中心になっていた。また、リザーブ内では住人が移動して廃村になった集落とその他の集落とに分かれた。ただし、ニューカデ村に移動した住人のなかには、のちに元の集落にもどった人がいる点が注目される。

生業複合：この時代の生業では、狩猟採集が衰退して農耕や家畜飼育が盛んになった。とくにウシ飼育に依存する人が生まれる一方で家畜をまったく保持しない世帯が存在する。また、政府からニューカデ村の住人に配給された食料は、親族関係などをおしてリザーブ内の集落の住民にも配分されていたことが明らかになった。これは、リザーブの内外の地域へのサンとカラハリ農牧民の連合体としての新たな対応を示す。

以上のことから、ボツワナ中部のサンは過去80年のあいだ時代に、「遊動キャンプ」、「半定住集落」（モラポ）、「定住集落」（カデ）、そして「村落」（ニューカデ）という4つの異なる形の集落での生活をしてきた。とりわけ定住集落のサンは、定住化以前より農耕や家畜飼養に従事するのみならず商業狩猟を展開してきた。これらの背景には、サンが、リザーブ内の複数の半定住集落との社会的ネットワークを持ちながらも、世帯ごとに異なる暮らしを選択してきたことがみられる。具体的には、リザーブ内のサンの場合、リザーブ内のキャンプから土地利用権のある定住集落、そして土地所有権のある村落へ移動した人がいる一方で、村落から半定住集落にもどる人もいた。

また、サンの貯蔵と分配の問題を考える際に、貯蔵するものが野生スイカや狩猟により獲得した動物の肉の場合には、それがたとえ交易用に使われるものであっても、平等主義による分配が集団内で機能する。しかし、彼らの所有物がヤギの場合には類似の傾向が多少は認められるものの完全に平等主義による分配というわけでない場合もあり、さらに大型家畜のウシがサンの社会に導入されると、ヤギ以上に個人による所有が明確になり分配の機能が働きづらくなっていた。

このようなことから、過去80年におけるサンの移動と生業複合の変化をみると、各時代のサンのなかで多様な居住地選択が生じており、遊動キャンプから半定住集落か定住集落、そして村落に移動する世帯が多いものの「半定住の生活様式」が一部で維持されていた点は注目される。このことは、政府の開発政策が進むなかで、多様な生業を組み合わせる「半定住の生活様式」は様々なリスクに柔軟に対応できる形であることを示している。